

研究雑話 (49)

人間発達の物質的基礎 (十三) .. 知覚と行為、鏡配置の修正、上下・左右から対角線的な見比べ

藤井力夫

前回は、『まる』を閉じて描けることの意義についてお話ししました。砂場遊びのときは始める子どもたちで、内と外、上下、左右、大小、長短などの空間的諸関係についても把握しはじめることを意味するのです。それゆえ、子どもたちは、こうした関係のなかで自分なりの『つもり』を抱き、「いやだ」と主張するようになります。お話も発展できる所以です。今回は、この間、コースの課題などで問題にしてきた「対象を二つに分ける力」、この形成をめぐって克服しなければならぬ課題、鏡配置の修正についてお話ししたいと思います。これは、文字の世界への移行のための基本課題でもあります。

図を見ていただきたい。私たちが「変形ブロック構成課題」と名付けている課題。上がモデルで、厚さ二センチメートルの楕円盤に形の違う六種の内、四種の積み木がはめられている。上下八箇所から棒が出ており、はめたり抜いたりして同じものを構成する課題。三歳代ではどちらかにはめるだけ。四歳代になって上下に配置。五歳代で形や向きを調節しはじめるが、鏡配置が多い。図は一枠に付き、五秒間一秒毎の目と手の軌跡をプロット。目線は、丸の重ねで注視や照査の経過が分かるようにした。手指は左右の動きをL、Rで記した。ビデオ・モーション・アナライザー（毎秒一〇〇コマ）が開発されてすぐの二〇年程前の仕事

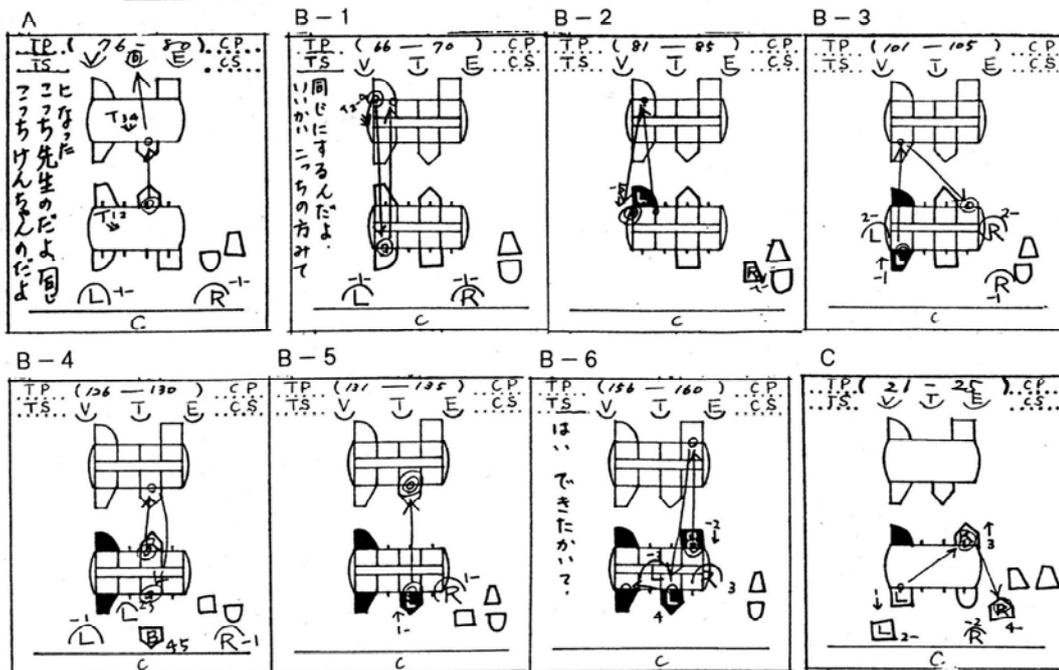
です。

五歳七カ月の男の子の事例。図A、第一試行、鏡配置で終わる（八〇秒）。そこで第二試行、図B。四隅に馬、猫、犬、象を描いた絵カードをモデル盤と子どもの盤に置く。位置の支えを提供。左上の「馬のところについているのと同じ積み木をつけて」という指示で同じ形の扇板を右手ではめる（再試行後、八三秒）。その後、左手前の犬の位置の直角台形をはめ（一二六秒）、対角線上にある右上のホームベース板の位置の誤りに気づき、下側につける（一三一秒）。この後は、容易に四角板を右上にはめ（一五七秒）、完成させた。

なにが鏡配置を克服させたか。それは直角台形からホームベース板への過程で左下から右上という対角線的な関係を理解できたこと。これが大きい。それゆえ、第三試行（図C）、位置の支えなしでも、目線を左下と右上といった対角線的に照査、自らの定位像を構成している。

なぜ、どの子ども鏡配置になってしまふのか。それは、上下、左右それぞれの照らし合わせに終わっているからです。これでは印象単位のまま、構成単位に変換できない。モデルとの照査、上下や左右の照査だけでなく、手前の自分の対象自体に対する内的な関係の照査、即ち、対角線的な照査が重要です。そのためには、まず、モデル

変形ブロック構成課題 Kくん (m. 5. 07 yrs old)



と自分の対象とを別のものとして分けることが前提。六歳三カ月ぐらいの子どもでそうした能力が形成されるようです。対称的な関係を自分のものであそびのなかで対角線な関係を自分のものでしたのでしょうか。アルファベットでも仮名文字の世界でもこうした対角線な関係が内在。これが重要（北海道教育大学教授）